

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K03574

研究課題名（和文）社会の形成と分裂の二源泉：ヒュームにおける共感と共同の利益について

研究課題名（英文）Hume's ambivalent ideas of 'sympathy' and 'common interest': The roots of formation and dissolution of human society

研究代表者

森 直人 (Mori, Naohito)

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・教授

研究者番号：20467856

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、哲学者・歴史家D.ヒュームの著作を横断的に読解し、「共感」と「共同の利益」を社会の形成と分裂を共にもたらす人間の両義的本性と捉える体系的解釈を構築しようとした。しかし研究の進行に伴い、この試みには「商業」と「主権」の結合を通じたその両義性の統制の解明が不可欠との着眼を得た。本研究では、これを基にヒュームの社会認識と歴史叙述における主権的権力と商業的社会の相関的な生成を探究した。その探求の一部として、商業と主権という問題系が持つ意義、関連するヒュームの歴史認識の幾つかの側面について成果を公表している（論文集への寄稿2件、紀要論文1件、書評1件、国際学会及びセミナー等での発表5件）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、ヒューム研究への貢献と経済学成立の前史に関する問題提起にある。ヒュームの思想に安定した社会の理念型を見出す解釈は（特に日本で）有力だが、本研究は彼に人間の社会的本性の不安定性と、商業と主権の結合によるその統制の認識を見出す。これは彼の近代社会認識をめぐる議論の発展への貢献となり、また経済学成立の土壌をなすスコットランドの商業社会認識の政治的含意に関する問題提起となる。また商業と主権の結合の認識は、学術的分業化が進み、政治と経済の連関を専門的に問うことが困難な現代の状況に対しても、一つの思考の可能性を提供するという社会的意義を持つと思われる。

研究成果の概要（英文）：Initially, this research aimed to construct a systematic reading of several major works of David Hume by examining his ideas of 'sympathy' and 'common interest' as ambivalent roots forming, but possibly dissolving, human society. As the research proceeded, however, it turned out another element needed to be incorporated in order to fully make sense of his thinking about ambivalence. More specifically, the link between sovereign power and commercial society presumably plays a role to regulate the ambivalent nature of human society in Hume's view. Based upon this notion, this research has examined his narratives on the interrelated evolution of sovereign power and commercial society in his Essays and History, and put forward several parts of the investigation thus far: two book chapters, one in-house journal paper, one book review, five presentations at international conferences and seminars.

研究分野：社会思想史

キーワード：ヒューム スコットランド啓蒙 共感 共同の利益 イングランド史 文明 主権 商業社会

1. 研究開始当初の背景

本研究の応募時点での計画に基づき開始当初の研究背景を記述する。研究代表者は、社会に関するヒュームの思想をめぐる多様な解釈のうち、現代の社会科学への先駆性を通じてその意義を強調する一群の研究と、歴史的な文脈の中で彼の著作の意味を探究する歴史的諸研究に着目した。これについて研究代表者は、後者の歴史的な文脈に基づく研究に学びつつ、現代の専門分化した社会諸科学の認識の限界を意識して、ヒュームの著作の読解を通じてその死角にあたる部分を可視化するような解釈を構築できないかと考えた。より具体的に、本研究では、「自己利益」及び「社会の形成と発展」への関心の集中が現代の社会科学とそれに基づくヒューム研究に1つの限界を生んでいると想定し、そうした関心からは後景化される「共感」「共同の利益」「社会の分裂と崩壊」をめぐる議論を中心軸とするような一つの体系的な解釈を試みることを計画した。

2. 研究の目的

以上に基づき、本研究の当初の目的は、『人間本性論』から『イングランド史』に至るヒュームの幅広い著作の中で、人間社会の形成と分裂がどう描かれており、「共感」と「共同の利益」がその形成と崩壊をどう導くのかを探究することであった。しかし実施状況報告書にも記載の通り、研究の進展に伴って、研究の第2年度(2017年度)に新たな着想を得たため、この当初の目的を再定義した。その着想とは、人間の両義的本性の視点から『イングランド史』の読解を進める中で得られた、ヒュームの文明社会理解の基盤に(専制的とも呼びうるような)主権的権力の想定が潜んでいるという認識である。この着想は、共感と共同の利益という二原理だけでは社会の形成と分裂をめぐる彼の認識を十分に読み解きえないことを意味する。この着想の重要性に鑑み、共感と共同の利益をめぐる検討は継続しつつも、文明社会における主権的権力のあり方についてのヒュームの認識の解明をより優先的な課題として再設定して、以降の研究を進めることとした。

3. 研究の方法

本研究の方法は、基本的には二次文献を参照しつつ一次文献を読解する通常の方法によるが、その中で複数分野の研究を参照した分野横断的な読解を意識し、各分野の持ちうる死角を可能な限り対象化する試みを行った。また、この試みの有効性の向上のため、国内外の関連諸分野の研究者との交流と、その助言に基づく重要資料の収集にも力を入れた。

より具体的には、特に文脈に基づく歴史的読解の知見と、現代の社会諸科学の枠組みに基づいた理論的研究の知見を比較しつつヒュームの諸著作を読解することで、現代的な枠組みの持つ限界の意識化を試み、その死角を照射するような思考の連環をヒュームに見出そうと努めた。その過程で、スコットランドでの研究交流や資料収集を行い、また海外の学会やセミナー等での研究発表、また海外から研究者を国内でのセミナーに招聘するなどして研究交流に努めた。

4. 研究成果

本研究では、以上の経過から、共感と共同の利益という両義的な社会的本性の働きを念頭に置きつつも、主にヒュームにおける社会の商業化と主権の強大化をめぐる叙述について考察を重ねた。そこから見てきたのは、ヒュームの『イングランド史』において語られる文明化の差し当たり、一元的な法による自由の保障と、商業的・奢侈的な生活様式の広まりとしての強大な、そして専制的ですらありうるような主権的権力の生成と相関的であるということ、そして『道徳・政治・文学論集』における政治と経済をめぐる議論が、この商業と主権の連環を基本的には認しつつ描き出しているという理解である。この理解は、思想史分野の諸研究(特に、研究成果の論文(1件目)にて記述したJ・G・A・ポーコック及び竹本洋の解釈)に学びながら、現代的な解釈の持つ死角を意識化しようとする試みのなかで得られたものである。

この理解を構成するいくつかの内容をこれまでに研究成果として発表し、未発表の内容についてはさらに今後公表を期している。

これまでに発表した成果としては、まず『イングランド史』で描かれるいくつかの時代と場所(特にローマ期のブリテン、ステュアート朝初期のアイランド、そして名誉革命後のブリテン)を通じて、ヒュームにおける文明理解が強大な主権的権力と結合しているという解釈がある。こ

れについては、京都での国際セミナー（学会発表5件目）韓国・延世大学で行われた研究セミナー（学会発表3件目・招待講演）を経て、図書（1件目）に寄稿の一章として公表した。

次に、テューダー朝期の政治権力のあり方に着目し、それが絶対王政であるか、それ以上に強大な権力であるかを検討した内容がある。この内容について、シドニーでのオーストラリア・アジア地域近世哲学セミナー（学会発表4件目）京都での国際セミナー（学会発表1件目）ブダペストでの国際ヒューム学会（学会発表2件目）にて発表した。ただし後述のコロナ禍等による業務多忙化を主因として、論文としての公表には至っていない。

ヒュームの『イングランド史』と『道徳・政治・文学論集』が、相互に複雑な関係を含みつつも、全体としては商業社会と主権的権力の結合としての「文明社会」の「モデル化」を示しているという包括的な把握は、ポーコックの研究を参照したごく試論的な形ではあるが、図書（2件目）に寄稿の一章の一部として公表した。

さらに、この商業-主権の連環の認識が持つ思想史上の重要性と現代的な意義について、現代における経済的・政治的権力の複合の様相からその思想史的背景まで、シェルドン・ウォリンおよびポーコックを中心とする論者の議論を参照しながら論じた内容を、所属機関紀要に発表している（雑誌論文1件目）。併せて、この認識がスコットランド啓蒙の論者たちに対して有する適合性を検討する作業の一環として、スコットランド啓蒙研究の大家クリストファー・ベリーの論文集について書評を執筆した（雑誌論文2件目・書評）。

以上のように、本研究では、共感と共同の利益をめぐる解釈の構築という当初の構想から、商業と主権の連環の検討という新たな着想へと軸足を移しつつ研究を進め、一定の成果を公表してきた。しかし2019年度以降は、研究期間を複数回延長しながらも、成果公表は停滞することとなった。その要因は、第一にコロナ禍の直接的影響としての研究計画の変更であり、第二にその間接的影響も含めた所属機関および所属学会での業務負担の増大である。コロナ禍の直接的影響として海外での資料調査やそれに基づく論文の最終的な推敲が一定期間不可能となり、またその間接的影響により所属機関での業務負担が複数年にわたり著しく増大した。さらにこれとは別の要因からも、所属機関・所属学会での業務負担が相当程度増加したこともあって、延長した期間においては研究時間が厳しく制約された。そのため本研究には未公表の成果が複数存在している。共感と共同の利益に関する包括的な解釈の公表は長期的課題としつつ、それら未公表の成果について、今後早期の公表を目指したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 森直人	4. 巻 21
2. 論文標題 商業社会のリヴァイアサン：越境の時代の「自治」を考える糸口として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際社会文化研究	6. 最初と最後の頁 77～107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森直人	4. 巻 43
2. 論文標題 [書評] Christopher J. Berry, Essays on Hume, Smith and the Scottish Enlightenment	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 99-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Naohito Mori
2. 発表標題 Reconsidering Hume's View of the Tudor Government and its Implication for his View of Civilized Society
3. 学会等名 Kyoto University Early Modern Intellectual History Seminar
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naohito Mori
2. 発表標題 On Whether the Tudor Government was an 'Absolute Monarchy': Reconsidering Hume's View of the Rise of the Civilized Society
3. 学会等名 45th International Hume Society Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naohito Mori
2. 発表標題 David Hume and Enlightenment: why that matters in non- "western" regions
3. 学会等名 a special Research Seminar on Early Modern Intellectual History (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naohito Mori
2. 発表標題 On Whether the Tudor Government was an "Absolute Monarchy": Reconsidering Hume's View of Authority, Laws and Liberty
3. 学会等名 1st Australasian Seminar in Early Modern Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naohito Mori
2. 発表標題 Civility and Slavery: Another Story concerning Hume's View of Civilization
3. 学会等名 Kyoto University Early Modern Intellectual History Seminar
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 R.J.W.Mills and Craig Smithほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Edinburgh University Press	5. 総ページ数 344
3. 書名 The Scottish Enlightenment: Human Nature, Social Theory and Moral Philosophy: Essays in Honour of Christopher J. Berry (第8章を担当)	

1. 著者名 岩井淳, 竹澤祐丈他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 356
3. 書名 ヨーロッパ複合国家論の可能性：歴史学と思想史学の対話（第13章担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Kyoto University Early Modern Intellectual History Seminar	開催年 2018年～2018年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------